今、何の病気が流行しているか！

【感染症発生動向調査事業から】

KAWASAKI CITY

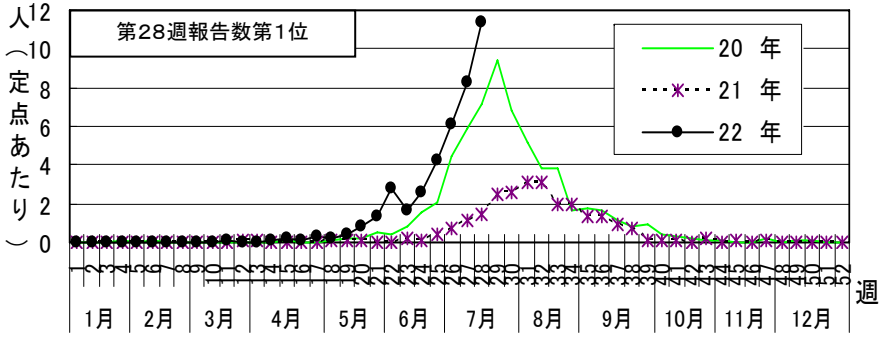
平成２２年７月１２日（月）～７月１８日（日）〔平成２２年第２８週〕の感染症発生状況

第２８週で報告数の多かった疾病は、1)ヘルパンギーナ　2)感染性胃腸炎　3)手足口病でした。

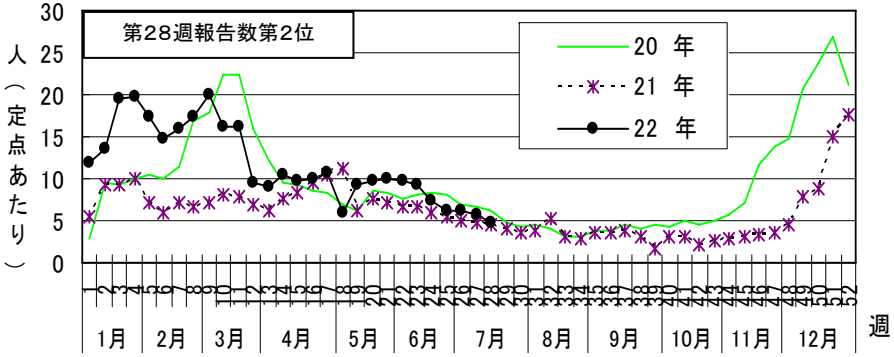
ヘルパンギーナは定点あたり１１．３９人と前週（８．３０人）に比較して患者数は大幅に増加しており、区別では特に高津区・宮前区・多摩区で報告数が多くなっています。年齢別では、４歳以下の子どもに多く流行しています。手足口病は４週連続で患者数が増加し、定点あたり３．７３人となっております。特に多摩区では定点あたり７．２０人と流行発生警報基準値（定点あたり６人）を超えております。

※訂正　第２７週の感染症情報で、細菌性赤痢の記載に「推定感染地域原因及び地域：南米地域への渡航」とお知らせしておりましたが、南米地域ではなく「アジア地域」でしたので、訂正させていただきます。

ヘルパンギーナ発生状況（3年間）

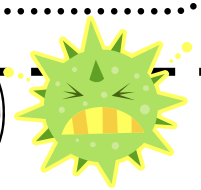


感染性胃腸炎発生状況（3年間）



ヘルパンギーナの流行に注意！！

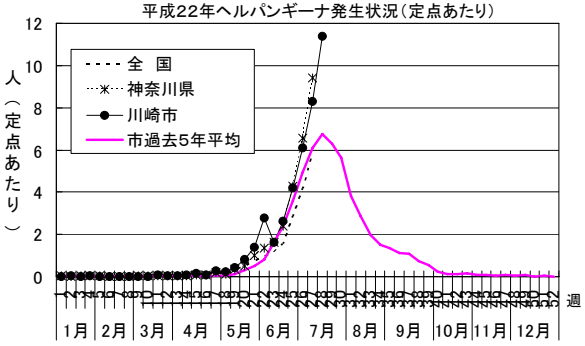
～平成14年以降で最も多い報告数～



５月以降、例年より早い時期から、４歳以下を中心に、患者数の増加をみせていたヘルパンギーナですが、７月に入ってもその患者数は増加し続け、第２８週の報告数は平成１４年以降で最も多い報告数となっております。

ヘルパンギーナは、いわゆる「夏かぜ」の代表疾患ですが、まれに髄膜炎などを合併し、重症化する可能性がありますので、今後注意が必要です。

平成22年ヘルパンギーナ発生状況（定点あたり）



ヘルパンギーナってどんな病気！？

潜伏期間（２～４日）を経過した後に、突然の発熱に続いて、のど（奥の方）に直径 1～2mm 、場合により大きいものでは 5mm ほどの水疱（みずぶくれ）が出現します。水疱はやがて破れ、浅い潰瘍となり、痛みをともないます。発熱については ２ ～4 日間程度で解熱します。のどの痛みのため、不機嫌、拒食、哺乳障害、それによる脱水症などを起こすことがありますが、ほとんどは予後良好です。まれに髄膜炎を合併することがあります。発熱・頭痛・嘔吐がひどいときや水分が十分にとれないときは、早めに医療機関に受診しましょう。

～ヘルパンギーナの予防対策～

ウイルスに感染してから症状が出るまでの期間（潜伏期）は通常２日から４日です。最初の症状は、38～40℃の発熱です。飛沫感染のほか、のどや鼻の分泌物あるいは便の中のウイルスが、手などによって、口や鼻の中に運ばれて感染します。感染させてしまいやすいのは、症状が出てから２、３日までです。予防のためには、患者も、その周囲の人たちも、手をよく洗うことです。症状がなくなっても、患者の便からは、一ヶ月ほどウイルスが出ている可能性があるので、特に患者のおむつを替えた後などは良く手を洗いましょう。また、患者のタオルは別にしましょう。

発行　川崎市健康福祉局健康安全室・衛生研究所・各区保健福祉センター（保健所）